

# 受光効率を高め 秋まき小麦を安定して穫る

## 概要 Abstract

①道央でも、起生期を無追肥とする幼穂形成期重点追肥で、受光態勢を向上させながら起生期追肥と同等の収量が得られます。

②幼形期重点追肥によって、葉が直立しやすくなり、葉の量が適度となるため、受光態勢が向上します。

③安定生産の目標穂数550~650本/m<sup>2</sup>と、良好な受光態勢を確保するための指標を設定しました。

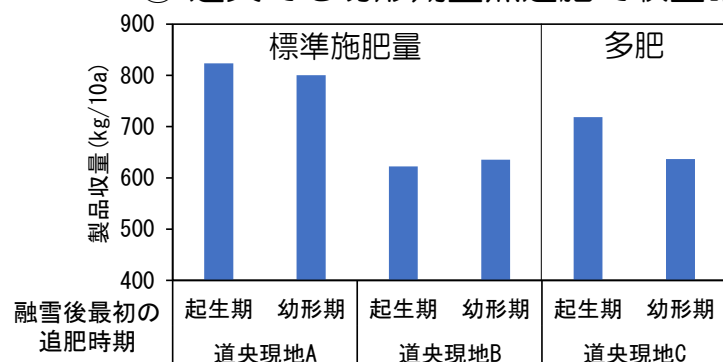
真上からの様子（登熟時期）



地面が見えるぐらいでちょうど良い

## 成果 Results

① 道央でも幼形期重点追肥で収量確保。起生期茎数で施肥を判断（道央）

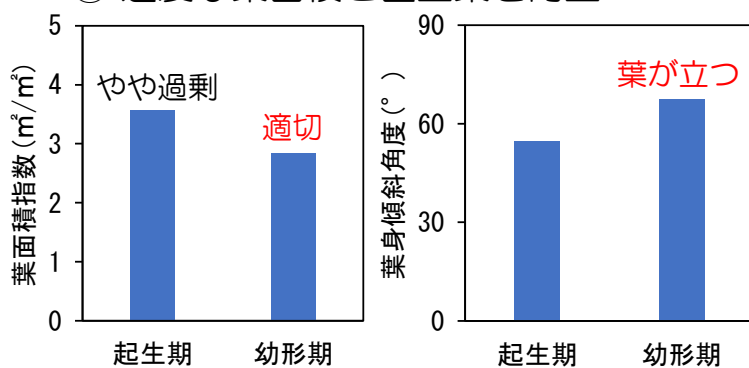


起生期茎数 (本/m <sup>2</sup> )	窒素追肥(kg/10a)	
	起生期	幼形期
1000 以上	0	6
800~1000	2	4
800 未満	6	4

起生期を無追肥とすると、受光態勢が向上  
適期・適量播種で起生期茎数1000本/m<sup>2</sup>確保！

標準施肥量：幼形期重点追肥で起生期追肥と**ほぼ同等**  
多肥： // 減収する場合も

② 適度な葉面積と直立葉を両立



③ 安定生産に向けた生育の目安

生育期節	項目	道央	道東 <sup>1)</sup>
越冬前	主茎葉数	5.5~6.5	4~6
	茎数(本/m <sup>2</sup> )	800~1250	550~900
起生期	茎数(本/m <sup>2</sup> )	1000~1400	1000~1500
止葉期	全茎数(本/m <sup>2</sup> )	800~1000	—
	上位茎数(本/m <sup>2</sup> )	590~750	620~800
開花期~ 乳熟期	穂1本葉面積(cm <sup>2</sup> ) <sup>2)</sup>	~54	
	葉面積指数(m <sup>2</sup> /m <sup>2</sup> ) <sup>2)</sup>	2.8~3.5	
成熟期	穂数(本/m <sup>2</sup> )	550~650	

1)オホーツク沿海は除く。登熟期間中の日照が多いため、従来通り

2)葉面積は上位3葉の値

## 普及 Dissemination

- ・幼穂形成期前に葉色が急に褪めたら、その時点で追肥してください。
- ・高タンパクになりやすいほ場では、止葉期追肥量を減らしてください。

## 連絡先 Contact

中央農業試験場  
農業環境部 生産技術グループ  
0123-89-2001  
central-agri@hro.or.jp